

シャギリの指導方法と伝承母体の変化

小林 力

① シャギリの指導方法

シャギリの指導方法は山組によって異なる点がある。ここでは各山組の指導方法の差異と指導方法の変化について見ていく。

(1) 指導方法の概要

指導方法は、囃子保存会の曲を演奏する山組（春日山（本町組）・青海山（北町組）・諫鼓山（御堂前組）・高砂山（宮町組）・常磐山（呉服町組）・翁山（伊部町組）・鳳凰山（祝町組）・壽山（大手町組）・孔雀山（神戸町組））と、山組独自の曲を演奏する山組（月宮殿（田町組）・猩々丸（船町組）・萬歳樓（瀬田町組））とに大きく分けられる。基本的に囃子保存会の曲を演奏する山組は楽譜を重視する傾向があり、山組独自の曲を演奏する山組は口伝を重視する傾向がある。

囃子保存会の曲を演奏する山組では、シャギリを習い始めると笛から練習させる。しかし近年は少子化によって子ども確保が難しくなっているため、シャギリの開始年齢を引き下げており、手が小さくて笛の穴を塞げなかったり、肺活量が足らず笛を吹けなかったりする子が出てきている。そこで鳳凰山や壽山などでは笛が吹けない小さい子どもにすり鉦をさせている。

笛の指導は、まず笛の持ち方・息の入れ方といった吹き方の指導をする。その後は音が完全に出なくても、曲の練習に合わせて指の使い方を指導する。指の使い方指導方法は二種類あり、一つは囃子保存会の楽譜に書かれた運指表で覚えさせる方法である。運指表には笛の穴

を塞ぐ箇所の色が塗られている。もう一つは上級者が指使いを見せて教える方法である。各山組は二種類の指導方法を併用している。曲の覚え方は二種類ある。春日山・高砂山・常磐山は楽譜を見つつ旋律をドレミの音階でうたつて曲を覚えさせるが、諫鼓山・鳳凰山は初めにCDを渡して覚えてきてもらう。しかし、小さい頃から祭りを見ていたり、長浜市立長浜小学校ではリコーダーでシャギリ（「神楽」のみ）を練習する授業があるため、多くの子どもはシャギリを始める前からすでに曲を覚えている。

山組独自の曲を演奏する山組でも、基本的にシャギリを習い始めると笛から練習させる。月宮殿と萬歳樓では笛が上手く吹けないと太鼓を練習させない。さらに萬歳樓では太鼓を習得してからすり鉦を練習させる。これは、すり鉦に合わせて太鼓を叩き、太鼓に合わせて笛を吹くため、すり鉦は太鼓と笛を熟知していないとできないと考えられているためである。これらの山組は囃子保存会の曲を演奏する山組に比べ習得する楽器の順序が厳しく決められているといえる。

山組独自の曲を演奏する山組での笛の指導は口伝が中心である。萬歳樓ではまず笛を持たさず、うたつて曲を覚えさせる。歌をうたうことをクチヨウという。クチヨウは「チ・リ・ヒ・ユ・兵（ヒヨ）・ヒャ・フ・ラ・ウ・ヲ」で表現される。クチヨウができるようになると、笛を持たせて指使いだけ練習させる。それができてから笛を吹かせる。笛が吹けるようになってくちヨウはさせ続ける。フチヨウとよばれる、クチヨウでうたう文字と運指表が書かれた楽譜があり、指導にはこれも用いる。萬歳樓の指導方法は、昭和三〇年代初頭に萬歳樓の若い衆が高砂山の若い衆と共にシャギリを教わりにいった四ツ塚での指導方法を踏

襲している。月宮殿では楽譜は全く使わず、口伝と指使いの真似をさせて指導する。指使いの真似は子どもが指導者の後ろに座り、肩越しに指を見て覚える。狸々丸では三〇年前までは口伝で指導していたが、現在は五線譜の楽譜を用いて練習している。指導方法は囃子保存会の曲を演奏する山組とほぼ変わらない。

(2) 楽譜の利点と問題点

現在シャギリの伝承には五線譜化した楽譜が重要な役割を果たしている。ここではシャギリの五線譜化にともなう利点と問題点を見ていく。

囃子保存会の二代目会長S氏によって萬歳樓を除く山組のシャギリは五線譜化された。囃子保存会発足後、S氏が五線譜化した四ツ塚のシャギリを、シャギリを伝承していなかった山組に教えた。さらに、独自にシャギリを伝承していた月宮殿と狸々丸と青海山のシャギリも五線譜の楽譜に書き起こした。しかし月宮殿はS氏が作成した五線譜を現在使用していない。

シャギリを五線譜化したことによる利点に、①普及しやすくなった、②曲の習得が速くなった、③旋律の差異がないため異なる山組と一緒に演奏したり、異なる山組との間で囃子方を融通しやすくなったことなどが挙げられる。

シャギリを習う人は五線譜化していない楽譜、たとえば「ウ・ヒョ・ロ」表記の楽譜などでは音の高低や長さ・大小が分からないため、結局指導者から口伝で旋律を教わって初めて曲が理解できる。しかも口伝では指導者によって微妙な差異が生じてしまい、時代を経るうちに曲が変わってしまう。

シャギリを五線譜化したことにより指導者による旋律の差異がなく

なったりえに、楽譜を見てすぐに旋律がわかるため曲の習得が速くなった。さらに祭りの際、ほかの山組から囃子方の応援をもらうことが容易になっている。出番山の山組は、男子を役者に、若い衆は狂言の運営に人員を割かれるため囃子方が不足する。しかし、曳山はシャギリが始まらなければ動かすことができないとされているうえに、「出笛」が吹かれなければ狂言を始められない。山組にとってほかの山組からの囃子方の応援は必要不可欠である。

しかし五線譜化したことによる問題点もある。その一つに没個性が挙げられる。青海山の年配者によると、昔のシャギリは音色や旋律はバラバラだったが、現在のシャギリは整い過ぎて、面白みがなく飽きるという。つまり旋律の規準が明確になったために、旋律の振幅が狭くなり遊びの部分がなくなったのである。さらに、譜面どおりに演奏することが正しい演奏だという意識になったといえる。また、鳳凰山の中老によると、譜面だけだと「べたべた」した音になるといふ。つまり曲調が平坦で、曲の表情が乏しくなるといふことである。

シャギリを五線譜化したことで、シャギリの旋律は統一化され時代による変化もなくなったが、祭りをする人は必ずしも統一された音色を求めているわけではないことがわかる。

(3) 山組の独自性

一方で山組の独自性を強める指導も見られる。たとえば楽譜に頼るのではなく、個人で音色や曲調を探索させるといった指導方法を採用している山組がある。青海山では、前述のような年配者の意見を受けて、笛はあくまで自分が吹く音を尊重し、独自流を貫くよう指導している。したがって「正しい」とされる吹き方や音色をとくに指導していない。

また、鳳凰山では楽譜に頼りすぎないために、ある程度曲を覚えると共に楽譜を見ないようにして、音を聴いて覚えるように指導している。指導するときも「琵琶湖の波のように」など雰囲気だけを伝え、あとは個々で想像させるようにする。ほかにも山組だけで演奏する場合は独自性を出してもよいとする山組もある。翁山では、翁山だけで演奏するときには「御遣り」に独自の装飾音を入れても構わないとしている。また、狂言が始まる前に独奏する「出笛」の吹き方は個人に委ねるとする山組は多い。楽譜どおりに吹く人もいれば、テンポを変えたり、アレンジを加えたりする人もいる。月宮殿では「出笛」の装飾音はとくに教えない。個人の技量に応じアレンジをして演奏するのである。したがって毎回同じような旋律にはならない。

意図せずに山組の独自性が生じることがある。常磐山と壽山は二〇〇五年まで合同で練習していたが、現在は分かれて練習している。分かれてから常磐山のシャギリのテンポが早くなった。太鼓を担当している子どもが早く練習を終えて遊びたがるため、太鼓のスピードが速まったことが要因である。月宮殿も、太鼓の担当が自分の未熟さをごまかすために早く終わらせようとしてしまい、以前よりテンポが速くなってしまった。メトロノームを使って練習するわけではないため、個人的な事情でテンポが変わりやすいといえる。とくに太鼓は全体をリードするため影響が大きい。

ほかにすり鉦の叩き方も山組によって異なっている。五年余り前まで一緒に練習していたにもかかわらず常磐山と壽山とはすり鉦の持ち方が異なる。常磐山では五本の指ですり鉦の縁を持ち、壽山は中指と薬指を折り曲げ、ほかの三本の指ですり鉦の縁を持つ。ちなみ壽山の

持ち方は昭和五〇年代初頭に囃子保存会が山組に指導した持ち方である。この違いが生じた要因の一つに、小さい子が三本の指ですり鉦を持たないため五本指で持たせるようになったことが挙げられる。背景には少子化による囃子方の減少により加入年齢を引き下げている組織形態の変化がある。ほかにも音色の好みによって持ち方を変えていることも考えられる。萬歳樓では五本指と掌ですり鉦をしっかりと握って音を響かせないようにしている。ほかの山組のすり鉦の音色や叩き方を参考にして、演奏方法を少しずつ変えていることが考えられる。

このように同じ曲を吹いていても少しずつ旋律やテンポが異なってくるため、祭り前には応援に来る山組と一緒に練習をして旋律やテンポを調整している。たとえば、諫鼓山は出番山のときは、応援に来る鳳凰山の囃子方と祭り前に二、三回合同で練習してお互いの吹き方を馴染ませていく。

(4) 指導方法の変化

指導方法に変化を及ぼす要因として、指導者と子どもの人数の関係が挙げられる。たとえば、子どもの数に対して指導者が多ければ、指導者は個人に対して丁寧な指導する。常磐山は二、三〇年前、指導者が三人に対して子どもが五人だった時期があった。子どもの人数に対して指導者の人数が多かったため、個人指導があり厳しかったという。現在は町外から子どもの加入を認めるようになり、指導者が三人に対して子どもが二〇人以上になることがある。子どもの人数に対して指導者が少ないため、個人指導は初心者にするくらいでわずかである。演奏の注意も個人に対してよりも、全体に対するものが多い。

萬歳樓は指導者の増加と子どもの減少により個人指導を充実させら

れるようになった。現在は子ども時代にシャギリを習った若い衆が多くなり、四人の役員以外の若い衆や高校生が毎回数人練習に参加する。役員以外の若い衆や高校生を指導役に当たらせることができるため、個人指導ができるようになったのである。萬歳樓は毎回子ども一人ひとりの進度を見る試験をして、その後、進度に合わせた個別指導をしている。このときに役員以外の若手の若い衆や高校生が子どもにマンツーマンで指導している。教えることで指導役に当たった若い衆や高校生もシャギリを覚えるし、指導者の立場になったときに経験が活かされるという。しかし、三〇年前は指導者が二人だけだったため進度に合わせた個別指導はできなかった。

ほかに、指導方法が丁寧になったという山組もある。萬歳樓では、三〇年前若い衆が酒を飲んだり喫煙をしたりしながら指導していた。若い衆が茶碗を叩いて「この音をだせ！」と言ったりした。子どもの送り迎えも無かった。現在は酒もタバコも禁止している。

また、指導方法は指導者によって変わることもある。萬歳樓は囃子方の指導者がシャギリの習得が遅い子どものためにフチョウ（楽譜）に笛の穴を押さえる場所を記した図をつけた。この特製のフチョウが評判になり、ほかの子どもも使うようになり、現在では全員がこのフチョウを使っている。

一方で、変化していない部分もある。囃子保存会の曲を演奏する山組は、練習する曲の順番や休憩の入れ方がほぼ共通している。これは囃子保存会に加入当初、保存会から指導された練習方法を踏襲しているためである。基本的に「御遣り」・「神楽」・「戻り山」・「奉演間」を練習して休憩を挟み、再び同じ順序で練習する。「奉演間」は休憩の前か

後のどちらか一回のみとする山組が多い。ただし「起し太鼓」は、囃子保存会ができる以前から各山組で伝承されており、囃子保存会の指導外だったため、普段の練習で「起し太鼓」をするか否か、またいつ練習するかは山組によって大きく異なる。

② 礼儀作法

練習中に意識的に礼儀作法を指導する山組は少ない。挨拶の音が小さい子や、練習中に足を崩す子や遊び出す子などもいるが、それらに対して指導者が注意することはほとんどない。これは狂言の稽古と大きく異なる点である。練習中も子ども同士や指導者と雑談をする。このゆるやかさがシャギリの練習の特徴といえる。

礼儀作法を意識的に指導する山組も少ないながらある。萬歳樓では子どもに靴を揃えさせたり、稽古中に正座をさせ続けたりする。挨拶の音が小さければ再度挨拶させることもある。注意したことができるまで何回も注意し続けるため、泣かすこともあるという。また祭りで亭に上げる子は上手い下手ではなく普段の練習の姿勢で決めている。

③ 楽しませる工夫

子どもに練習を楽しませる工夫をしている山組は多い。諫鼓山では、ある中老が、頼んできた子どもの笛を合成漆で赤く塗っている。囃子方は、祭りの時に一時間以上吹き続けることもあり精神的にも肉体的にも大変な役割だが、必ずしも表舞台に立つわけではない。中老は子どもにシャギリを嫌いになってほしくないという願いから笛に色を塗るようになった。また、赤は諫鼓山の囃子方の法被にも用いられる色で、

同じ色の笛を持つことで団結力が増す効果があるといえる。

シャギリの休憩時や練習後にお菓子やおもちやなどを渡す山組もある。毎回渡す山組と一年に一度渡す山組、シャギリの試験に合格したときだけ渡す山組がある。お菓子やおもちの費用は各山組が負担する。壽山や狸々丸・常磐山などは練習後に毎回お菓子を配っている。翁山では年末に図書カードを配っている。萬歳樓は練習中の試験で合格した子どもにくじ引きをさせてスーパーボールをあげている。

また、休憩時間は子どもにとって練習に来る楽しみの一つである。翁山では現在休憩中にトランプをすることが多いが、三〇年前はピンボールを持ってきて笛をバット代わりにして野球をしていた。壽山の筆頭は、たとえ上手く吹けなくても小さい頃から遊びにきて楽しい雰囲気味わってもらいたいという。ほかに鳳凰山では花札をしたり、萬歳樓では子どもが若い衆にじやれたり、「別嬪」を一緒に吹いたりして遊ぶ。春日山や諫鼓山などでも若い衆と子どもと一緒に遊んだり雑談をする。現在は町外からも囃子方の参加を募るようになったため、子ども会や学校が異なる子どもが集まるようになった。シャギリの練習のときにしか会えない友人もおり、休憩時間はなかなか会えない友人と遊べる貴重な時間となっている。また、大人や中高生など異なる年齢の人と遊べることはシャギリにおける遊びの特徴である。

ほかに練習以外の時間にレクリエーションをする山組もある。萬歳樓は夏に夜市といって屋台を出したり、キャンプなどをしたりする。高砂山は地蔵盆やクリスマス会などを催している。

こうした楽器の装飾や練習中練習以外での遊びなどが結果としてシャギリを続けられる要因の一つとなっていると考えられる。伝統行事で

伝承しなければならぬから練習しているという意識ではなく、単に練習中に友達と遊べることが楽しみでシャギリの稽古に来ており、それが結果として継続的な伝承につながっているといえる。

④ 伝承母体と指導者

シャギリを伝承する母体は山組で組織された囃子方・囃子連中・囃子部などといわれる集団と、各山組の囃子方を統括・調整する機能を持つ囃子保存会である。各山組の伝承母体をここでは総称して囃子方とする。

萬歳樓以外の囃子方は若い衆に属し、若い衆が中心になって指導を担当する。萬歳樓は若い衆や中老から独立して囃子方が組織されており、囃子方独自の規約を作ったり会計をしているが、指導者は若い衆のみから選出されている。

囃子方の指導や事務などをおこなう担当者は若い衆のなかで決めている。しかし、ほとんどの山組で担当者以外の人も自主的に指導にあっている。担当者以外で指導にあっている人は若い衆以外に、中老や高校生・町内在住の女性がいる。指導者の多様化・増加は、昭和四九年から囃子保存会が子どもに指導し始めたことや、昭和五〇年代後半以降シャギリの門戸を女性にも広げたことにより、山組内においてシャギリのできる人材が増加したことが要因である。

若い衆で選出されるシャギリの担当者には、山組外の出身者がなることが多く見られる。諫鼓山・鳳凰山・常磐山では山組外出身者が担当となっていた。また、萬歳樓のある役員は山組出身だが、親がよそから引っ越してきたため、子どものころは生粋の山組出身者に遠慮して

シャギリに入れなかった。自分の子どもがシャギリを習うようになって、同じ趣味が欲しくてシャギリを始めた。

指導者だけでなく子どもも山組外からの加入を許可している。山組の子であっても別の山組のシャギリに参加する場合もある。このように山組において囃子方は比較的外部に開かれた部分であるといえる。壽山の若い衆は「狂言に比べてシャギリはオープン」という。

他方、組織の安定化も進められている。青海山では平成二〇年頃に囃子部が組織された。それまではとくに指導する人を決めていなかった。また壽山では二〇〇五年以降若い衆の中に囃子方という役職を設けてシャギリの指導や事務をおこなうようになった。

これまで、少子化や若い衆の減少によりシャギリの伝承の維持が難しくなった山組もあったが、女性の参入やシャギリができる若い衆の増加などにより再び安定した伝承ができるようになっているといえる。しかしその背景には小さい子どもに合わせた指導方法への変更や、女性や山組外出身者による指導者の増加などの質的な変化がある。シャギリは変化を柔軟に受け入れつつ伝承している芸能といえる。さらにシャギリの練習に遊びの部分が多いことや厳しさが少ないことも伝承を維持させている要因といえる。

1 各山組から選出される囃子保存会の幹事は中老がなることもある。ここではあくまでも指導などをする実務担当者。

2 壽山と孔雀山は平成初頭に山組での伝承が途絶えたが、壽山は平成一六年に常磐山と合同練習を始め、孔雀山も平成二三年から再び伝承し始めている。